

している。断じてこのままにしておくことは出来ない」という声が政府部内に高まつてきた。龍溪先生までが疑われるように、この度の大隈勳は大隈が陰謀を引いていふのだと、政府内の反大隈派の宣伝であつた。しかし大隈排斥の狼火は益々広がる一方で、大隈とともに立憲政治をめざしていた伊藤博文も井上馨も、「我々と大隈とは立場がちがう」と反大隈に廻つてしまつた。大隈は明治十四年十月十三日遂に諭旨免官となり、大隈と意を通じ直接間接の行動をとるにしてきた者は、悉く官を辞して廟堂を去つた。無論、龍溪先生も大隈に殉じ、在官三年二か月に於て職を辞したのである。

今度の大隈の失脚は、單なる官有物松下の事件が火元になつて大火事になり、それが飛火して自分の手を焼いたやうなものであつた。しかし大隈が桂冠した日の前日即ち明治十四年（一八八一年）十月十二日に、明治二十三年を期して國會を開議するといふ、次のやうな大詔が渙発されたのである。

「……將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ招シ國會ヲ開キ以テ朕カ初志ヲ成サントス。今在廷臣僚ニ命ジテ假スニ時日ヲ以テシ經營ノ責ニ當ラシム。其組織權現ニ至リテハ朕親ラ衷ヲ裁シ時ニ及ニテ公布スル所アラントス。」

この大詔渙発はわが國の史上特筆すべきことであり、まことに開闢以來一新時代を劃するものである。「三四年の内には必ず實現せしめよう」とした先生ら主張に比べ、なお五六年おくれれるが、その目的のためには身をささげた先生たちの努力が報いられた、よしおくれるといへども、所期の目的を達成する日が確定したことは、非常の大きな收穫であつた。龍溪先生らは失脚したとはいへ、この意味では大いに満足されたことである。（註）

研究

緒方惟栄と惟庸

會員 佐 脇 貫

緒方惟栄と佐伯氏については、これまで度々書いてきたが、その關係について從來とはちがつた考へ方に到達したので、私オりの史料の解明について書いて見たい。渡辺澄夫先生は「大分県の歴史」の中で

「豊後大神氏は阿南、植田、大野、臼杵の諸氏に分かれる。阿南氏は大分郡阿南莊に勢力を占め、小原、大津、武宮、橋爪等の諸氏を分出する。植田氏は植田莊に定着し、吉藤名、光吉名、上義名、行弘名の名主となり、おち地頭として勢力をふるう。大野氏は大野莊の莊官として大友氏に反抗する。臼杵氏は臼杵莊、猪方莊、佐賀郷、戸次莊、佐伯莊、賀来莊に勢力を伸ばし、このなかから緒方惟栄らが輩出する。」

と書いておられる。私も本誌四十五号に豊後大神氏について考究し、だいたい先生と同様の記述をしたが、臼杵氏については流連の大神系圖のまま、惟盛（惟基の五男）を三重九郎大夫として、その後を臼杵氏とした。

臼杵氏はもろもろ臼杵莊に居住していたから臼杵氏を称したもので、臼杵莊（二百所）を中心し、佐伯莊（百八十所）、佐賀郷（百五十所）、大野郡猪方莊（二百八十所）、大分郡戸次莊（九十所）、賀来莊（二百三十所）にそれぞれ一族を進出させて勢力を伸ばした。系圖によると惟盛の後惟衡、惟用の二代を経て臼杵二郎惟隆、緒方三郎惟彦、佐賀四郎惟憲があり、その居住地と輩行を

伝えている。

ここで問題になるのは佐伯惟庸（又は惟康）で、佐藤鶴谷翁はその著「佐伯志」のなかで、惟庸を三重次郎惟家の子とし、惟家と惟栄の關係について「親子説」として、佐伯惟は惟栄より孫惟庸に伝えたものとしてゐる。（大神系図は凡とんと惟康と記載し、一つに惟庸と註しているから、あるいは惟康が実名かも知れない）渡辺先生は引用の大神系図で惟康の父惟家を白井惟衡と二男、つまり白井大七惟用の弟としてゐる。この系図によると惟康の位置も明らからず、惟家は三重郷に住み三重二郎、その長男惟澄は戸次莊に拠つて戸次二郎、二男惟康は佐伯莊を領して佐伯三郎と称してゐたことが納得できる。

緒方惟栄は一族中の傑物であつた。源平合戦を記録している多くの史書、軍記類はいずれも惟栄を豊後武士団の頭領としてゐる。惟栄と共に史書に名を連ねてゐるのは、兄の白井二郎惟隆と弟の佐賀四郎惟憲だが、「両蔓記」には野尻二郎惟村（惟栄二男）の名が見える。しかし佐伯三郎惟康は大神系図に記載されてゐるから見て、大友興隆記などの郷土關係の軍記類にもその名を見ることのできなない。佐伯氏の始祖とはいはなからず、惟栄と佐伯氏がつなぐ伝承上の人物ではないかと、その存在がいささか疑問視されてゐた。ところがこの頃、「源平盛衰記」に、壽永三年平家が一の谷に拠つたとき米会した西國の武士として「菊池次郎高直（隆直）、原田大夫隆直、松浦太郎高俊、郡司權頭真平、佐伯三郎惟康、坂三郎惟長、山鹿兵藤次秀遠、坂（敏）井兵衛種遠」などの人々の名があるのを見て、佐伯三郎惟康が同族の惟栄とは別行動をとつて、平家方に参陣してゐることを知つたのである。

緒方惟栄は治承五年（一一八二）二月二十九日、肥後の菊池隆直と共に反平氏の旗をあげて、原田種直（平氏方）と戦つてゐるが、平氏の全盛時代は「平家物語」に「かの維義は小松殿の御家人也」とあるように、惟栄は平重盛に属してゐた。一族中の傑物であつた惟栄が平氏御家人を称してゐたのであるから、惟栄の兄弟たちも佐伯維庸（惟康）、戸次惟澄などの一族も平氏に属してゐたに違いない。緒方惟栄が豊後守藤原頼経の命（頼経はこれを院宣と称して惟栄に命令した）をうけて大宰府にあつた平氏を襲い、筑前山鹿から海路豊前宇佐へ、さらには讃岐屋島に走らせたとのことは壽永二年（一一八三）八月から十月の間で、当時の情勢は中央に木曾義仲、西に平氏一門、東國に源頼朝（鎌倉殿）があり、勢力が均衡してゐたが、この十月、義仲が備中水島で平重衡のひきいる水軍に破れたことから均衡がくずれ、十二月頼朝の義仲追討軍をひきいて範頼、義経が上洛、翌三年一月いよいよ木曾令戦が行われて、義仲の衆軍敗死で一段落。京都の治安警察は義経の手で保たれることになつたが、このとき義経と共に事に出つたのが齊院次官中原親能（大友能直の養父）である。

四國屋島に拠つてゐた平氏は、源氏方の内紛に乗じて、摂津の福原に進出したが、範頼、義経は一月二十九日平氏追討の命をうけ、二月五日根津に入り、一の谷の合戦が展開された。佐伯維康が菊池隆直、原田種直らと共に平氏方として参陣したのはこの戦で、七日平氏は怒り、これとなつて敗退、その主力は屋島に逃れた。屋島の戦は元暦二年（一一八五）二月で、一の谷から九一年の後である。この間に佐伯惟康はどこにどうしてゐたか不明であるが、緒方惟栄は元暦元年（一一八四）壽永三年四月十六日（改元）七月六日、兄白井惟隆、弟佐賀惟憲と共に宇佐宮を襲つて神

殿を破壊し、御神体の藤御験や黄金の御正体をはじめ累代の文書などを奪取した。翌元暦二年正月、惟栄らは赤間関で西下中の範頼に謁し、その命によつて兵船八十二艘を献じた。

壇の浦の戦は三月二十四日で、このとき範頼は豊後に入り、豊前の平氏方と対決していた。一方、平氏を屋島から追い落とした義経は、瀬戸内への割海権をその手に収め、三月二十一日周防國に入り、二十三日には最後の基地長門の赤島を出て豊前田の浦付近に集結した平氏主力と、海峡を隔てて壇の浦奥津に布陣、戦機が熟するのを待った。壇の浦の決戦は義経軍と平氏主力との間で、二月二十四日正午平軍の全滅で終わったが、範頼は豊前にあり、範頼方としては三浦義澄が義経軍に合流参戦した。この戦に菊池隆直、原田種直、山鹿秀遠らは平氏方として矢戟に参加しているが、佐伯惟康は参戦していない。

壇の浦の戦の後、渡辺先生の記述(大分県の歴史)によると、緒方惟栄は義経と前後して上洛しているようで、頼朝、義経の仲が疎隔して、義経は九州にのこられることになり、後白河法皇が惟栄を院中に召されて義経の護衛と先導を命じたが、義経一行は摂津の大物浦で台風にあい、軍勢は離散壊滅、義経も惟栄も先行先不明になったと書かれている。しかし「西豊記」には

「頼朝、義経兄弟不和になり、義経は京都に在り、頼朝追討の院宣を賜り、西國勢を催さんがため、緒方三郎惟栄をかたははれければ、惟義一味同心して、九國の勢を催し、豊後國岡の城を築き、これを義経討けの城とす。それより豊前國所々に、豊後國よりのつなぎの城として、宇佐郡には空森の城に家人を籠めおき、下毛郡には大丸の城に一族佐伯惟貞、同郡野中郷大綱

の城に賀来次郎惟興……云々」とあつて、義経九州下向を待っていたが、一行が大物浦で遭難し、惟栄は鎌倉の憎しみをうけて上州沼田に流罪になつたと記述してある。「西豊記」の信憑性はとにかくとして、ここで問題になるのは惟栄の命で、義経迎えのため大丸の城に拠つたという佐伯惟貞、大丸の城に入つた賀来惟興などで、大神系國のあるものは惟栄の兄弟に賀来五郎惟興をつくり、大神姓佐伯氏系國には惟康の二男に佐伯惟定(惟貞)があり、堅田左衛門と称している。なお賀来氏系國によると、大神惟基四世の孫惟安を祖とすであつて、佐伯氏系國の惟康の三男賀来四郎惟頼に出る賀来氏に符合する。

惟栄が沼田に配流されたのは宇佐宮焼亡の罪が主であり、平氏追討の功は一応認められていた(元暦二年二月院庁の御下文をうけて賞詞を賜つてゐる)。文治元年十二月(元暦三年八月十四日改元)の頼朝書状(玉葉)によれば、平氏方であつた原田種直、菊池隆直、板井種遠、山鹿秀遠らの所領は、一応没官ということになつたが、十二月現在まで処分せずにいると記載されており、その後いづれも本領を安堵されてゐるから、当然佐伯惟康も本領佐伯莊を安堵され、惟栄赦免の後これを佐伯莊に迎えたものであろう。賀来惟頼は惟栄より賀来莊を継承したもののか。

私はさらに惟朝(惟康の子)以後についても考えて見たいが、後日にゆづることとする。(おわり)

おわび——本篇標題は「緒方惟栄と佐伯惟康(庸)」となつていたが、少し変な形で、單に佐伯惟康と変えておりました。もう印刷がすすんでいてどうにもなりません。惟康即ち惟康で、序に言う佐伯惟康も惟康でありませぬ。おわびまで。(庸)